

2023年3月13日

熊本県知事 蒲島 郁夫 様

清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会 共同代表 岐部 明廣
7・4 球磨川流域豪雨被災者・賛同者の会 共同代表 鳥飼 香代子・市花 保
子守唄の里・五木を育む清流川辺川を守る県民の会 代表 中島 康

球磨川流域豪雨災害・被害拡大のメカニズムの探求を求める 要請書

日頃は県民のためにご尽力くださることに、敬意を表します。

2021年11月4日以来、私たちは蒲島知事に対し、球磨川流域豪雨災害において何が被害を拡大させたのかを探るための共同検証の申入れを断続的に行ってきました。私たちが現地を歩き数百名以上もの被災者に体験談を伺い、数千枚に及ぶ映像の収集・解析を行う中で、二度で終結した球磨川豪雨災害検証委員会では全く言及されていない被害拡大要因となった論点（第四橋梁問題）が、明らかになったためです。

しかし県は、2020年10月時点のデータを根拠に共同検証を拒否し続け、人吉大橋危機管理型水位計のデータを理由に、第四橋梁問題の存在をも否定し続けています。私たちの疑問に真正面から答えないまま、国交省と県は球磨川河川整備計画を決定し2022年8月9日に策定・公開しました。

一方で、人吉大橋・危機管理型水位計が当日本当に計測できていたのか、疑問を抱かざるを得ない状況があります。2022年8月23日、9月12日、10月21日にわたってこちらが提示した豪雨災害当日の映像資料からは、危機管理型水位計の設置面を超えて水位が上昇している様子を、確認することができます。にもかかわらず県は、国交省資料を鵜呑みにして映像資料が示す現実を受け入れず、頑ななほどに共同検証を拒絶し続けています。

10月21日の申入れで私たちは、人吉大橋が計測できていたことを示す資料を提示するよう求めました。具体的には、危機管理型水位計の物品管理記録などの水没しなかったことを示す観測データ以外の裏付け・浸水深調査の具体的地点（＝建物の東西南北どの地点を採用したか）などです。しかし、被災者を含む流域住民から疑問の声が上がっているにもかかわらず河川整備計画の手続きは着々と進められ、私たちが求める上記の根拠資料は開示請求を促されるのみで示されぬまま、現在に至っています。

国交省によるガイドライン「美しい山河を守る災害復旧基本方針」では、豪雨災害を受けての改良復旧事業に際し、「多自然川づくりの考え方を基本とし、再度災害防止はもちろん、河川環境の保全、維持管理の視点を踏まえ、経済性を考慮し稼働の計画・設計を行う。また、流下土砂による河道の埋塞、流木による河道の閉塞等が被災原因となっている場合には砂防施設等との連携も図り再度災害を防止する」として、次のように指摘しています。すなわち、近年の大規模災害時には過剰な土砂が供給されて河道が埋塞し、あるいは大量の流木が流下して橋梁を閉塞させ、災害を複雑かつ拡大させている事例が散見されるようになってきたことから、流域の地形・地質や砂防施設の整備状況、樹木管理の状況等を分析しそれらの影響を見極めて河道計画を検討することが重要だと（146-147）。

上記を鑑み、下記についてガイドラインに基づいた検証の実施を行うことを、強く求めます。

○被害拡大要因のメカニズムについて

- 合流点で発生した大氾濫の範囲と氾濫の要因はいかなるものか
- 第四橋梁に流れ込んできた多量の丸太はどこから来たのか
- なぜ午前7時頃から大洪水が球磨川ではなく陣之内の水田を激しく流れる事態が発生したのか
- 上新町などの市街地には7時頃と9時頃の2回大きな洪水が流れ込んだ。2回目の方が大きかった。なぜ、こんな氾濫が発生したのか
- 大橋のピーク水位の根拠として左岸側の痕跡107.94mを挙げているが、なぜ右岸側を無視するのか。中川原地点の洪水は右岸側に大きく偏り、大きなうねりを形成しながら流れるように川のつくりを変えてしまった事実を踏まえて、説明せよ
- ハリケーンを前提としたLife Simモデルを球磨川で用いる合理性とその理由を述べよ

◎支流や水路、微地形が及ぼした影響について

- 四浦地点の流速計算について説明せよ
- 万江川の氾濫はいつ・どこで起きたかを列挙し、その氾濫をバックウォーター現象の考えで説明せよ
- 山田川の氾濫はバックウォーター現象ではない事実があるのに、今なおバックウォーター現象になぜしがみつくのか
- 下林町や下薩摩瀬町で氾濫水の激流に飲み込まれて亡くなった方がいるが、温泉町でゼロなのはなぜか

○治水対策の限界に対する認識について

- 流水型ダムを造るにもかかわらず大柿地区の立ち退きを求めるのはなぜか

○緑の流域治水の観点から見た山地の開発の現状について

- 茂田川上流域の山では、県が許可を出した発電事業によって41haの山が皆伐されその広い範囲でコンクリートが張り巡らされている。球磨川との合流点付近に至るまで捷水路と化し、上流の山間部は皆伐されている状態を、県は把握しているのか。緑の流域治水を標榜しているが、許可を出したのちの現地の状況把握および市民からの不安の声をどれだけ把握し、そのうえでどのような対応を行っているのか

以上

問合せ先：

手渡す会事務局長 木本 雅巳